

2022年4月10日 半田朝礼拝

午前10時30分

司会 竹内喜保

奏楽 小出由里子

前奏

招詞

フィリピの信徒への手紙 第2章 6節-11節

讃美歌

讃美歌 21-51-1 (愛するイエスよ)

交読

詩編 第24篇 (p. 25)

祈祷

聖書

マタイによる福音書 第27章3~10節

(新約 p. 56)

讃美歌

讃美歌 21-311-1 (血しおしたたる)

説教

「誰が救われるのか」

聖書には実に沢山の人が登場しますが、中にはどうひいき目に見ても、悪人としてしかわたしたちの目にうつらない人物がいます。それはおそらくイスカリオテのユダです。イエス

さまの敵として登場する人たちは他にも大勢いました。イエスさまを殺そうといろいろと画策した祭司長や律法学者たちもそうですし、イエスさまに対して死刑の判決を下し、それを実行したローマ帝国のユダヤ総督ピラトもそうです。けれど、これらの人たちはいわば単純にイエスさまの敵でしたが、彼らに比べるとイスカリオテのユダという人物は、イエスさまから12人の弟子たちの一人として選ばれ、そのグループの会計係という大切な役割までも託されていたほどに信頼を受けていたにもかかわらず、イエスさまを敵に銀貨30枚、つまり、奴隷一人の値段といったごくわずかな金額のために売り渡してしまった、いわば裏切り者であったということが、ちょうど喉に突き刺さった魚の骨のように、わたしたちの心にいつまでも突き刺さる思いがします。

そして、聖書がユダという人物について記しているその書き方もまた特別であるように思われます。たとえば一番古い福音書と言われるマルコによる福音書の第14章3節以下には、

イエスさまがその生涯の最後に近い時期にベタニアで食事をしておられた時、一人の女性が高価な香油の入った石膏の壺を壊して、香油をイエスさまの頭に注いだという有名な出来事が書かれています。その行為を見て「そこにいた人の何人かが、憤慨して言った。『なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか・・・』』」と書かれています。つまり、もっとも古い言い伝えでは、この女性を非難したのは「そこにいた何人か」でした。ところが一番新しい言い伝えと言われるヨハネによる福音書の第12章1節以下では、この一人の女性はマリアであるとされ、非難した人間は「弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った」となっていますし、ご丁寧にも「彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていながら、その中身をごまかしていたからである」という説明までつけ加えられています。こうしたマルコからヨハネにいたる言い伝えの変化を見ると、感心な女性はマリアで、悪者はユダであるという評価がかたちづくられていく経過のようなものがまざまざ

と伺い知られます。イエスさまの十字架が大切なものとして重んじられればられるほど、その直接の原因をつくったユダが悪人であるということが強調され、悪いことは全部ユダのせいにされてしまうほどであったと言えます。

このイスカリオテのユダの最期について書いている福音書は一つだけしかありません。それは今朝のマタイ福音書の第27章3節以下だけです。他の福音書がユダの最後について何も書いていないのは、あるいは書き記すほどの価値を認めていなかったからかもしれません。その中でただ一つ、ユダについて書き記しているマタイの記事は貴重だとも言えると思います。順を追ってその箇所をご一緒に味わっていきましょう。

イエスさまを裏切ったユダは、イエスさまに有罪の判決が下ったのを知って後悔したと書かれています。いったいユダがどうしてイエスさまを裏切ったのかというその動機については、いろいろな憶測がなされていますが、イエスさまの有罪判

決を聞いて後悔したというこのマタイの説明は、その動機的一端をわたしたちにうかがい知る手懸かりを与えているとも言えます。それは少なくともユダが会計係として使い込みをしたので、その穴埋めにお金が必要だったからだとか、ユダがお金の亡者だったといった単純な動機ではなかったことをわたしたちに示してくれているようです。ユダはイエスさまの有罪判決を知って「こんなはずじゃなかった」と後悔したのですから、そこにはまた別の期待が込められていたことも十分うかがわれます。あるいはユダはイエスさまというお方はいよいよ追いつめられたら、メシアとしての超能力を発揮して、ただちに神の国を実現してくださるに違いない、とでも期待して、自分がそのきっかけをつくろうと考えたのかもしれませんが。ところがユダのもくろみとは違って、イエスさまはとうとう処刑されることになってしまいましたから、ユダは「しまった。こんなはずではなかった。大変なことをしてしまった」と後悔することになったとも考えられます。わたしたちはこのマタイだけが書き記しているこのユダの最期についての記事から、彼が自分のした

ことについて後悔したという貴重な証言を得ることが許されています。

ユダは後悔して、もともとお金が目的ではありませんでしたから、その銀貨 30 枚を返そうとしましたが、祭司長や長老たちはそれを受取ろうとしませんでしたから、彼はそれを神殿に投げ込んで、自ら命を絶ってしまいます。自死はユダヤ人にとっては神さまから与えられたいのちを自分の意思で左右できるように考える罪でしたから、ユダの最期は彼のしたことに対する当然のことということになるのかもしれませんが。けれどこのしばらく後になるエルサレム陥落にともなって、ユダヤ軍は死海の近くのマサダというヘロデの別荘のあった天然の要塞に立てこもって抵抗して、最後には集団自決をしています。それが今では英雄的な行為として評価され語り伝えられているほどですから、機械的に自死が許されない罪だという理解だっただとは言えないと思います。

ユダの「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」という罪の告白をしたのは祭司長とか長老たち、つまりユダヤ教の指導者たちでしたが、彼らはユダのその罪の告白を聞いても何一つできなかつたこともここでははっきりしています。ユダヤ教はユダを救うことはできませんでした。それではイエスさまはどうだったのでしょうか。ある注解者はユダの罪はイエスさまを裏切つたことではなくて、イエスさまの赦しを信じなかつたことにあると言います。果たして、そう言えるのでしょうか。いまわたしたちの前に展開されているユダの最期は、自分の罪にのたうちまわっているユダの姿です。イエスさまはこのようなユダの姿を予測しておられたはずです。このユダの姿に果たしてイエスさまは心を閉ざすようなお方だったのでしょうか。ある別の注解者は、もしもこのようなユダの姿にわたしたちが心を動かされるならば、イエスさまはそれ以上に心を動かしておられるに違いないと述べています。そうだろうと思います。主イエスとはそのようなお方ではなかつたでしょうか。

6 節から 10 節を見ますと、他方で、この銀貨を神殿の中から拾い上げた祭司長たちは、このお金は汚れたものだから神殿の収入にすることはできないと言って、陶器職人の畑を買って、そこを外人墓地にしたとあります。ユダは確かにイエスさまを銀貨 30 枚で売り渡しましたが、自分のしたこと、自分の罪に苦しみ抜きました。けれど、ここで見る限り祭司長たちにはまったく罪の意識は見られません。もともとこの銀貨 30 枚は彼らがユダに与えたものですから、彼らもまた少なくとも共犯者であるはずです。あるいは主犯者だと言ってもいい。けれど、彼らはあたかも自分たちは何事もなかったかのように、そしてユダをあたかも汚れたものを扱うように始末しています。ユダを非難する場合にわたしたちもまたいつのまにかこれらの宗教家たちのようにならなければ幸いです。

マタイはこうした一切の経過が、旧約聖書の預言の実現であると締めくくっています。ここで引用されている言葉はゼカリヤ書の第 11 章 12 節から 13 節のところですが、そこにはこ



う書かれています。

「わたしは彼らに言った。『もし、お前たちの目に良しとするなら、わたしに賃金を支払え。そうでなければ、支払わなくてもよい。』彼らは銀 30 シェケルを量り、わたしに賃金としてくれた。主はわたしに言われた。『それを鋳物師に投げ与えよ。わたしが彼らによって値をつけられた見事な金額を。』わたしはその銀 30 シェケルを取って、主の神殿で鋳物師に投げ与えた。」

ここには主の牧者としての労苦をどのように評価するのかということが論じられ、銀 30 シェケルという見事な侮辱的な評価がなされたので、主の指示に従ってそれを神殿で使用する鋳物、陶器をつくる鋳物師、陶器職人に投げ与えたということが記されています。

さらにエレミヤ書の第 32 章 6 節以下には、エレミヤが主

の言葉に従ってアナトトの畑を買ったことが記されています。  
しかも 18 章 2 節にはエレミヤが陶工の家で主の言葉を聞くことがのべられています。アナトトの畑は彼が主の言葉を聞いた陶工の畑を意味するものであると考えれば、これらのエレミヤとゼカリヤの預言がユダの最期において実現したことをマタイは特に大切なこととして記録していると言えます。つまり、これらの一切が旧約の時代から新約の時代に至る神の救いのご計画の中に位置づけられていると言えます。

こうして見ていくと、福音書の中でマタイだけがこのユダの最期を書き残している意図は、それが救いの歴史の一部であるということにあることが分かります。ユダの出来事によって神の救いのご計画が支障をきたすどころか、それはまことに計画の一部であった。

しかも、ルカはユダの最期については、使徒言行録の第 1 章 17 節以下で短く触れ、18 節でこう言います。「このユダは

不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるようになりました」と。ただし、ルカ福音書ではひと言もそれについては触れていません。ところが、今朝のマタイ福音書はそれを福音書の中で述べています。その一つの意味は、これが旧約聖書以来の神の救済のご計画の一部であるというところにあることはすでに見たところです。

けれど、さらにユダの後悔の言葉の中に「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言っている言葉に注意したいと思います。確かにユダはここでは自分の罪について告白していますが、主イエスのことを「罪のない人」と告白しています。当時の当局者がイエスさまの有罪判決を下しているそのただ中で、ユダはイエスさまの無罪を告白しています。主イエスの死は罪のないお方の死であるということこそ福音で

すから、このユダの告白はまさに福音の証人としての告白でもあったのです。

このような福音の証人でもあったユダは、キリストの救いに与ることが許されたでしょうか。

このユダについてはいままでもいろいろと興味ある解釈がなされています。ユダの気持ちの奥深くまで入り込んで、主イエスに対するユダの独特な思い、愛からユダの行為を解釈しようとした文学作品もありますし、ユダとペトロとは実は同一人物であったという仮説を立てて、ユダの側から福音を司会していこうと試みたものもあります。また、ユダがいなければ主イエスの十字架がなく、主イエスの十字架がなければこの世の救いはないのだから、ユダは救いのためにはどうしても存在しなくてはならなかった人物として再評価を求めた修道士の作品などがあります。ただこれらはいずれもフィクションという形で、自由に想像の翼を広げ、これまでの評価である悪者の典型

としてのユダ像から離れてユダの問題を考えようとしていま  
す。けれど、わたしたちは今朝、そのユダを、福音書の中で示  
されていますので、ユダの姿を福音の一部として読み取り、理  
解することに努めています。わたしたちはユダが救済の計画の  
一部であったというマタイの視点を確認し、彼が有罪判決を下  
された主イエスの無罪を主張することによって福音の証人であ  
ることを見てきました。

このユダはマタイからヨハネに至る言い伝え、伝承の流  
れが示しているように、最初の頃の教会においては評価の低い  
扱いを受けてきたことは確かなようです。たとえば、「わたし  
は、その罪人の中で最たるものです」（I テモテ 1：15）と告白  
している使徒パウロは、果たして自分は確かに罪人の中で最た  
るものであり、かしらであるが、ユダよりもましな人間だと考  
えていたのでしょうか。わたしは決してそんなことはないと思  
います。最初の頃の教会の中でも評判の悪いユダのことも良く  
知っている中で、それでも自分は罪人の中でその一番にあたる

ものだと告白しています。それは、このような自分であっても、キリストは救ってくださることを確信していたからです。ユダよりももっとひどい罪人であるこの自分でも、あの十字架のキリストは救ってくださる。だとすれば、ユダは当然救われるということになるのではないのでしょうか。福音を一層あざやかに示す人物として、マタイがわたしたちに示しているユダを通して、主イエスの救いの深さ、広さに触れ、どん底でなおわたしたちを、ユダと共に受け止めてくださる十字架の主のみ腕にすべてを委ねて歩む者になりたいのです。

主イエス・キリストの父なる神さま。イスカリオテのユダをも憐れみ愛される恵みを感謝いたします。どうか、ユダにも劣らないわたしたちの罪と背きをお赦しください。あなたの憐れみと赦しがなければわたしたちは何もできません。ただただどん底でわたしたちを受けとめてくださる十字架の主イエス・キリストの憐れみによって、一步また一步とそれぞれの歩みを歩ませてください。今なお戦禍にあるウクライナを覚えま

す。人間の罪深さを思います。どうかあなたの御心がなされるために、わたしたち一人一人をお導き下さい。とりわけ国のかじ取りにおいて責任ある立場に置かれている者をあなたが支え、導き、その責任を正しく果たさせてください。病のため弱さを覚えておられる方の傍らにあなたが立ってくだり、癒しと平安を与え、さまざまな人生の戦いにある方々を励まし、新しいステージに進んだ方々を導き、遠い地にある兄弟姉妹を守りお支え下さい。全国に、世界中にある種の教会の働きを実りあるものとして祝福してください。そして、今日から始まる受難週を歩むわたしたちがあなたの十字架を思い、歩むことができますよう、主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。

アーメン

讃美歌	讃美歌 21-311-2 (主の苦しみは)
-----	-----------------------

献金	讃美歌 21-65-2
----	-------------

報告	週報の3頁を御覧ください。
----	---------------

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。  
主なる神に仕え、隣人を愛し、  
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。  
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と  
聖霊との親しき交わりとが、  
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>